

所属 中京大学 申請者氏名 三谷 舜

住所 〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101

TEL : 090-1159-3023 Mail: s-mitani@sass.chukyo-u.ac.jp

【研究題目】 ソフトボールにおける「スピード」のメディア言説に関する研究

1. 背景

日本における「ソフトボール」競技は、レクリエーションスポーツ、競技スポーツ、学校教育におけるスポーツなど、多様な側面を持ち合わせている。オリンピックにおけるソフトボールは、2021 年東京オリンピックでは、日本が優勝、アメリカが準優勝、2016 年リオオリンピックと 2012 ロンドンオリンピックでは競技が実施されず、2008 北京オリンピックでは日本が優勝、アメリカが準優勝という状況である。つまり、オリンピック競技としては当落線上にあり、常に「入れ替えの危機」にさらされているのである。

こうした危機に晒されている要因としては、競技人口や実施地域が拡大していないこと、競技の試合時間が読めないことが代表的なものとして挙げられる。後者の競技時間については、競技の特色が関係している。野球とソフトボールに代表される「ベースボール型競技」は、アウトを 3 つ記録することにより、表と裏で攻守を入れ替え、それを規定回数繰り返す「イニング制」によりゲームが進行する。したがって、時間や回数が規定されず、ゲーム時間の長短が読めないのである。

近年、メジャーリーグベースボールでは「ピッチクロック」と呼ばれる投球間隔を規定する計時ルールとシステムが採用されている。ソフトボールでも、投球間隔および打撃姿勢を規定するルールや、イニング間の攻守交代をスムーズに行うためのルールが設けられている。これらもまた、試合時間の短縮を目的としている。

2. 目的と方法

背景から、「なぜ、ソフトボールにおいて試合時間を短縮する必要があるのだろうか」という問いを導くことが可能である。また、ソフトボールにおけるスピード感という言葉は、「ボールやプレイヤーの動作が素早い」という、技術やパフォーマンスを表現することと、「試合時間が短い」、「攻守交代の担保が早い」という、試合全体が概観した特性を表現することの二重性を持っているのではないだろうか。

そこで本研究では、スポーツにおけるイメージが作られる力学と動態について、ソフトボールにおける「スピード感」という言説に着目し、日本ソフトボール協会機関紙『JSA ソフトボール』及び、『ソフトボール・マガジン』の資料を中心に検討する。報告においては、さらに深めたものの提示に加え、資料の検討の結果から考察に至るまで展開したい。本研究は、ソフトボールの普及戦略や競技の魅力を広めるための施策に活用されることに加え、スポーツ文化や競技特性が言語化される過程に関する新たな知見を提供する可能性があると考えられる。

3. 結果

(1) 『JSA ソフトボール』の検討

2025/3/10 号では、「審判ルール委員会」において「試合のスピードアップ」が唱えられ、審判員は「スムーズな試合進行」に係るルールとその遵守、適用」が責務であると確認されている。1985 年 8 月 10 日号では、審判委員会において、「審判員は（…）試合中ダラダラしていると感じた時や、攻守の交代が遅い時などは、気分を引き締める意味で活を入れる必要もあることでしょう」と記述されている。1988 年 2 月 10 日号では、北空知協会の役職者が「私は、ソフトボールの普及発展には、他の種目にはない本来のスピードある競技スポーツとしての魅力を知ってもらうことが不可欠と確信」と述べている。

このように、審判員に代表される運営スタッフはコンパクトでテンポよく試合が進行するように相互に確認し合い、またそのための制度的、運用的工夫を行なっていくのであった。

(2) 『ソフトボールマガジン』の検討

2022 年 9 月号（休刊時）では、現役選手を対象に「ソフトボールのどんなところに魅力を感じるか？」というアンケートが実施された。そこでは、スピード感、守備のスピード、野球とは違ったスピードというように、おそらく、パフォーマンスの速さを指すであろう「スピード感」という言説が見られた。

創刊号である 1977 年 7 月号では、高校私学ソフトボール選手権大会において、「各チームともコルク球のスピードのある打球処理にとまどい…」という記事や、日本とアメリカの差という見出しで「府中米軍との試合は、(…) 女子が勝ちましたが、男子チームも打てない位のスピードでした」という記事が掲載されるなど、用具の進化、先進国のパフォーマンスの高さを示す「スピード」という言説が見られた。

かたや、記事「野球とソフトボールはこう違う！！」では、「現代的なスピード感覚」との小見出しで、「ピッチャーのスピードについては前に触れましたが、この他とにかくスピーディーな動きと瞬間的な決断が要求されます」(…)「試合全体でみても、ピッチャーの無駄なけん制球によるロスタイムがなく、イニングも 7 イニングであることもあり、試合時間も短かく大体が 1 時間～1 時間半でゲームセットとなります」と競技が説明された。

このように、原則的にはパフォーマンススピードの高さを示す「スピード感」という言説が、野球との差異化を図る過程で「競技のコンパクトさ」や「試合時間の短さ」を示す言葉として意味が交錯する瞬間が見られた。

(3) 理論的仮説

こうしたいわゆる「メディア言説」を読み解くにあたっては、「メディアスポーツ」の枠組みから検討することが有用であろう。その一つは佐藤彰宣（2018）のような「教養としてのスポーツメディア」の意味である。つまり、雑誌により「ある一定の見解」が「教養」として共有されていくのである。ソフトボールマガジンでは、「ソフトボールには「スピード」感がある」ないしは「魅力である」という「教養」が共有されていく。

もう一つは、早川武彦（2005）が整理したような、スポーツ・メディア・視聴者が相互に作用し「メディアスポーツの公共圏」を構成するものである。ソフトボールというマイナースポーツはメディアを消費するのも競技関係者が多く、選手、審判・記録・運営、観客のうち、選手と審判・記録・運営がソフトボールに関連するメディアを消費していると考えられる。

4. 考察およびまとめ

これらの結果により競技者が高いパフォーマンスを追求する、つまり「スピード」を求めるというスポーツ実践者としての内在的な要求」がマイナースポーツ特有のメディアスポーツ的公共圏に反映されるのであるが、それは 1964 年の東京オリンピックや、その後の競技入れ替えから経験した「メジャースポーツになるために必要な「メディア露出」のための「スピード」感の追求」に書き換えられていくことが考察される。また、本研究は、「人々はスポーツの魅力をいかに語るのか？」というように問い返すことができる。その成果は更なる資料の読み込みや分析と合わせて、今後の研究の課題としたい。

5. 参考文献

日本ソフトボール協会『JSA ソフトボール』（引用年は本文中に明記）

恒文社、ベースボールマガジン社『ソフトボールマガジン』（引用年は本文中に明記）

佐藤彰宣、2018『スポーツ雑誌のメディア史』勉誠出版

早川武彦、2005「“メディアスポーツ”その概念について—スポーツの本質にねざすメディアスポーツ論に向けて—」、一橋大学スポーツ研究、24、3-12

6. 謝辞

本助成により、日本スポーツ社会学会第 34 回大会での報告を実施しました。付して感謝申し上げます。